[成果情報名]タマネギべと病越年罹病株の判別法

[要約]タマネギべと病越年罹病株を判別する際は、下から２～３葉を中心に調査することで、湾曲、黄化などの特徴的な病徴を見つけやすい。外観で判別できない場合は、株をポットに植え替えてビニール袋に入れ口を閉じ、10～15℃条件下に一晩置くことで、越年罹病株上に高率に胞子形成させることができる。

[キーワード]タマネギべと病、越年罹病株、判別法

[担当]長崎県農林技術開発センター・環境研究部門・病害虫研究室

[連絡先]（代表）0957-26-3330

[区分]野菜、総合・営農（干拓）

[分類]指導

[作成年度]2016 年度

[背景・ねらい]

タマネギべと病はタマネギ栽培における重要病害であり、４月～５月に大発生すると収量に大きな影響を及ぼす。タマネギべと病の防除においては、越年罹病株を分生胞子形成前に抜き取ることが重要である。しかし、厳寒期の株が小さい時期の越年罹病株を外観のみで判別するには慣れが必要であり、越年罹病株の抜き取りが徹底できていない。

そこで、越年罹病株の判別法について検討を行う。

[成果の内容・特徴]

１.葉の湾曲により越年罹病株を判断する場合、最下位葉を除く第２～３葉を対象に、噴水状に外側に向かって湾曲したものを目安に観察することで容易に判別できる（写真）。

２．葉の黄化により判断する場合、最下位葉を除いた葉で判断する。黄化部位は、葉が退色してくすんだ黄～黄白色を示す（表１、図１）。

３．外観で判別できない場合、越年罹病株と疑われる株を抜き取ってポットに植え替え、ビニール袋に入れて口を閉じ、10℃～15℃に一晩置く。感染株では葉上に暗紫～白色の分生胞子が高率に形成され、越年罹病株が容易に判別できる（図２）。

[成果の活用面・留意点]

１．本方法は、分生胞子が形成されにくい厳寒期に、越年罹病株を抜き取る際の早期判別法として活用できる。

２．判別は、定植時より１～２枚葉数が増えた頃から可能である。

３．越年罹病株を確認した場合は、速やかに抜き取り圃場外で適切に処理する。

［具体的データ］

写真１　越年罹病株の湾曲状況

表１　葉位、部位別の発病率

			調査発病葉位				
			最下位葉	第2葉	第3葉	第4葉	第5葉
		調査葉数	31	31	31	25	3
発病部位	基部	発病葉数	7	25	5	0	0
		発病葉率	22.6%	80.6%	16.1%	0.0%	0.0%
	中間	発病葉数	0	5	14	1	0
		発病葉率	0.0%	16.1%	45.2%	4.0%	0.0%
	先端	発病葉数	0	0	11	17	2
		発病葉率	0.0%	0.0%	35.5%	68.0%	66.7%
		葉位別発病数	7	30	30	18	2
		葉位別発病率	22.6%	96.8%	96.8%	72.0%	66.7%

品種：「ターザン」、定植：2016 年 12 月 8 日

調査場所：諫早市中央干拓　農技センター汚染圃場

調査時期：2017 年 2 月 9 日、13 日、調査方法：肉眼で病徴を確認

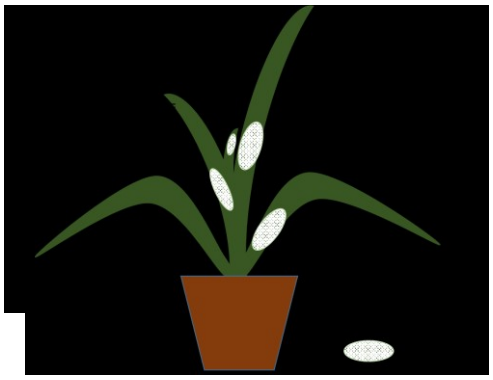

図１　べと病の発病部位模式

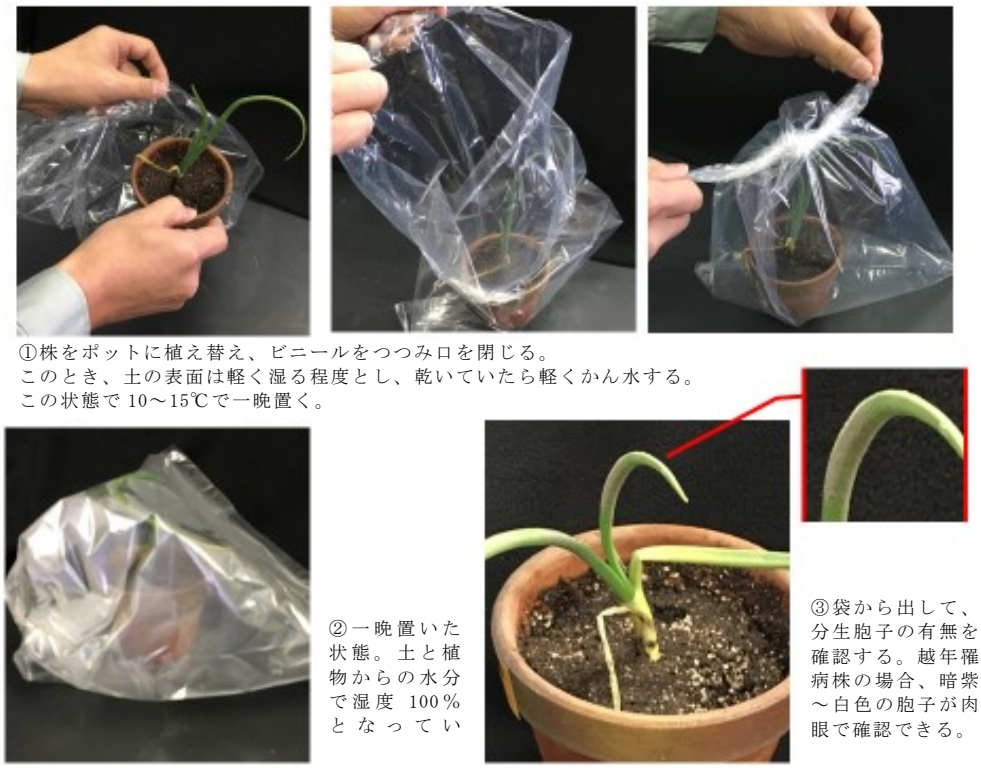

図２．タマネギべと病越年罹病疑い株の感染確認手順

研究課題名：タマネギべと病の防除体系の確立

予算区分：　国庫

研究期間：2016 年度～2018 年度

研究担当者：江頭桃子、中村吉秀、平山裕介